

# 数えられぬものを数えよ

—— 英語の不可算名詞について ——

松 瀬 憲 司

## Count the uncountable:

On uncountables in English

Kenji Matsuse

(Received September 30, 2021)

The distinction between countable nouns and uncountable nouns in English is very hard for us Japanese to clearly understand. This is because the Japanese language does not necessarily show the number for nouns in its grammar: we do not have to explicitly mark whether a noun is singular or plural. However, in English such number-marking is extremely important and a must. The big gap between these two languages always hinders us from learning English smoothly. The present study discusses, then, so-called 'genuine' uncountables in English that cannot be individuated even when we think of them as having some concrete entities, from the perspective of the history of English as a help of learning English. Have they really been genuine all the time in the history or not? The answer we obtained from this study is: they have NOT. This, therefore, suggests that any nouns which are now recognized as uncountables could be individuated and they all could, theoretically speaking, be treated as countables in grammar. The reality is just that some of them can be and others cannot *now* in Present-day Standard English.

**Key words :** countable( noun)s, uncountable( noun)s, singular, plural, individuation

### 1 はじめに

ものを「数える」行為を全く欠く文化は、この地球上には有りそうにないが、それをその当該の言語にどれだけ忠実に反映させているかは、文化によって随分違う（言語・文化・概念化の相互インターフェイスを採る Sharifian (2015) 提唱の Cultural Linguistics 参照）。所謂「加算 (countable) vs. 不可算 (uncountable)」の問題であり、それは名詞の形態論的構造に典型的に現れる。特に日本語母語話者が言語系統の違う英語を学ぶときには、日本語ではオプションである名詞の複数形形成や、単数名詞と連動する日本語には存在しない不定冠詞の使用といった、英語の文法項目との関わりにおいて、両言語間のギャップがかなり深刻な問題となり得る。だから、日本人向けの英文法書には、必ずと言っていいほど日英語間での「数え方」の違いについて何らかの記述があるものだ。例えば、

(1) a. Our teacher gives us **a lot of homework**/\**homeworks*.

—江川 (1991<sup>3</sup>: 9)

b. I bought **three pieces of furniture**/\**three furnitures*.

(1a, b) では、a lot of や three は複数概念を表すことから、英文法を学んだ日本人はつい \**homeworks* や \**furnitures* と、それに連動する名詞も複数形にしてしまいがちだ。ただ、両者に対する我々の発想には多少異同がある。(1a) に関しては、特に名詞の複数形を明示しなくてもよい日本語で「たくさんの宿題」と言うとき、「たくさんの」と言っているにも拘わらず、この場合の英語での単体・1個ではないことを表す a lot of と (複数形ではない) 単数形 homework との結合は、改めてこうなるのだと説明されると、日本語話者にもそこまで不自然ではないように思えて納得しやすい (我々も普通「宿題」と言うときに、算数の宿題とか国語の宿題とか、宿題を特に「個別化 (individuation)」して捉えていないからだろう)。だからこれはむしろ、

a lot of は複数形名詞と共起するという学習した英文法のルールに引きずられてしまって、\*homeworks としがちなのだと思われる。他方、(1b) の「家具」の場合、日本語ではどうしても書棚やテーブルなどの個別具体的家具がまずイメージされるので、それが「複数個」ならば、英語で複数形の \*furnitures になることは当然だろうという感覚から来る誤りと考えられる。後者と同様のことは、「荷物」baggage/luggage にも当てはまり、我々は \*baggages/luggages と複数形にしてしまいがちである。

このような名詞の加算・不可算の問題は、言語体系の中でも最も基本的であるが故に、第二言語習得、就中「英語」学習の初期段階でどうしても避けて通れない事柄なのだが、日本人学習者がその理屈をスムーズに理解することは、日英語間には上記のような外部世界の認知的把握の仕方に大きな違いがあるためなかなか難しい。<sup>1)</sup> 小中学生ならば、なおさらそうであろう。そこで本稿では、現代標準英語 (Present-day Standard English: PSE) の地平だけではこの問題を十分に解決できない事実を踏まえて、そこに「英語史的視点」を加味して分析することが、学習者の加算・不可算の理解にどの程度寄与できるのかを検討してみたい。言わば、英語を「立体的に」眺めて得られるものの確認である。

本稿の構成は次の通り。次節ではまず、幾つかの英語母語話者用文法書での加算・不可算名詞に関する記述を確認した上で、本稿で議論すべき問題点を明らかにする。続く3節では、初期英語における名詞の数えられ方を振り返ってみて、PSE での加算・不可算の状況との比較検討を行い、それらを元に日本人英語学習者としてこの加算・不可算問題にどのように対処すべきかを考える。そして最後の4節で全体の議論をまとめることにする。

## 2 問題の所在

手始めに以下に、Quirk et al. (1985), Biber et al. (1999), Huddleston and Pullum (2002), Swan (2016<sup>4</sup>) そして Depraetere and Langford (2020<sup>2</sup>) から、英語の加算・不可算名詞に関する記述の要点を示す。

- (2) a. 加算・不可算問題は、多くの場合、「多義 (polysemy)」の問題と考えられ、可算時の個別実体はそれ以上分割が不可能な「原子的 (atomic)」なものとして捉えられているのに対して、不可算時は、原子的ではなく、より小さい同質の実体に分割可能と判断されるというフェーズの差にすぎない。例えば、**a (bar of) chocolate vs. chocolate** —Quirk et al. (1985: 334-335)  
Huddleston and Pullum (2002: 246) はこれを *dual class membership* と呼んでいる。  
また、Depraetere and Langford (2020<sup>2</sup>: 109) では、可算名詞を「異質的 (heterogeneous)」, 不可算名詞を「同質的 (homogeneous)」としている。
- b. 上記 (2a) とは別に、加算・不可算で意味的に異なる同一語彙項目のペアもある。例えば、**I want an evening paper. [= newspaper] vs. Wrap the parcel up in brown paper. [= wrapping paper]**  
—Huddleston and Pullum (2002: 247)
- c. 通常不可算であるが、「転換 (conversion)」によって可算名詞に替えることがある (*reclassification*)。例えば、**Do you want tea or coffee?--Can I have a coffee, please. [= a cup of coffee]**  
—Huddleston and Pullum (2002: 248)
- d. 原子的ではない構成を持つ不可算名詞には、**water** や **chocolate** のような同質の実体に分けられるだけでなく、例えば **furniture** のように、机や椅子などの異質な部分の「集合体 (aggregate)」と見なされる場合もある。  
—Quirk et al. (1985: 336)
- e. 不可算名詞は通常「単数」扱いだが、稀に、(通常複合語の第一要素になる場合を除いて) 単数形を欠く複数形が存在する。例えば、**\*an oat, \*two oats, some oats** —Quirk et al. (1985: 338)  
その他、「複数」扱いの複数形不可算名詞には、**clothes, trousers, scissors** 等の「二連物 (bipartite)」や **thanks** 等もある。<sup>2)</sup>  
—Biber et al. (1999: §4.3.2.2)
- f. 学問名や病名等にも、常に複数形だが、「単数」扱いの不可算名詞がある。例えば、**politics, measles**。ただし、病名でも **cold** や **headache** などの軽い病気は通常加算扱いだが、**toothache** や **stomach ache** 等は、イギリス英語 (British English: BrE) では不可算になり、アメリカ英語 (American English: AmE) では、特定の痛みを表す場合、加算とされる。例えば、**I've got toothache. [BrE] vs. I have a toothache. [AmE]**  
—Swan (2016<sup>4</sup>: §119.7 & §123.3)
- g. 「加算性 (countability)」は、本質的に名詞の文法上の性質であり、名詞の対象物 (referent)

の性質ではない。だから、加算性は「特異的 (ideocyncratic)」であり、「予測不能 (unpredictable)」である (註 1) も参照)。

—Depraetere and Langford (2020<sup>2</sup>: 111)

上記から結局, (2g) がこの問題の全てを語り尽くしているように思える。同一名詞でも, 対象の捉え方 ((2a, c)) や意味的な区別 ((2b)) 次第で, 加算・不可算両方の性質を持つもののがかなりある事実がまず厳然とある。また, 同質のものだけでなく, 異質なものが集合していても不可算と見做されることも不加算名詞の特異性であろう ((2d))。さらには, 文法上の制約である加算性に大きく関係しているのは, これまた文法上の「数 (number)」の表示という形態上の問題であるが, (2e, f) から明らかかなように, 数の一致は一貫しておらず (特に複数形の使われ方), これのみが加算・不可算を決定しているわけでもない。加えて, *toothache* 等の AmE と BrE での捉え方の違いなどは, 英語という個別言語内でも変種毎の差異があることを示している。まさにこれらは, 特異的で予測不能と言わざるを得ないではないか。「水」が不可算であるということは, 日本語話者にもよく分かる話だが,<sup>3)</sup> なぜ「眼鏡」が不可算であり, かつ複数形として振る舞うのかになると途端に理解に苦しむのである。

このような混沌とした状況の中で, 日本人英語学習者が加算・不可算問題を, その一部ではあるが, 論理的に処理できる以下の方策を綿貫・ピーターセン (2006) が提示している (下線は筆者の強調)。

(3) a. *fruit* は, ふつう集合的に単数形で使うが [つまり不可算名詞扱いだ], 果物の種類を表す場合には, 可算名詞として扱う。例えば, *I bought a number of differently colored fruits.*<sup>4)</sup> —p. 336

b. [通常不可算名詞扱いの] 抽象名詞に形容詞がついているとき, 具体的なものを指すために可算名詞として使われている場合が多い。例えば, *a polite refusal* —p. 339

上記 (3a, b) から通常は不可算と考えられるものでも, 種類や具体性の想起という「個別化」が可能となき場合は加算できることが分かる。

ところが, 悲しいかな, このルールは万能ではない。いくら (形容詞を付けたりにして) 個別化して捉えても不可算のまま, 不定冠詞 *a/an* とは共起せず, 原則複数形にならない名詞が少なからず存在するからである。綿貫・ピーターセン (2006: 339) は, その例として以下の名詞を挙げている。

(4) *advice* [助言], *applause* [拍手喝采], *conduct* [品行], *damage* [損害], *equipment* [設備],  
*fun* [楽しみ], *harm* [害], *homework* [宿題], *information* [情報], *luck* [運], *news* [知らせ],  
*progress* [進歩], *weather* [気象], *work* [労働]

学習英和辞典である『ジーニアス英和辞典』第 5 版 [= *GEJD*<sup>5</sup>] では, ありがたいことに, 上記 (4) の単語すべてについて以下のような学習者への注意喚起が記載されている (ただ, あえて「複数形」には言及していないところに注意。<sup>5)</sup> 下線は筆者の強調)。

(5) 可算名詞として使われることのない純粹の抽象名詞。したがって形容詞に修飾されても不定冠詞は付かない。<sup>6)</sup>

ここで言う「純粹」とはどういう意味で, (3b) との違いは一体何であろうか。形容詞は修飾する名詞の属性を表すわけだが, おそらくその属性指示が (4) の名詞の抽象度を全く下げないということであり, 名詞自体の個別具体化が拒否されるということであろう。しかし, (4) に関して, なぜここまで形容詞による個別化が無効化されるのかは詳らかではない (我々の感覚では, *good luck* と *bad luck* は明らかに別物に映る)。ではこれらについて, *damage* と *harm*, *homework* と *work* および *conduct*, *information* と *news* を除いて, 特に統一的な「意味的な繋がり」は見受けられないようなので, 我々学習者はこれらをただ暗記するしか手がないのであろうか。そこで次節では, 視点を変えて, これら名詞の加算・不可算状況を歴史的に眺めてみようと思う。

### 3 可算・不可算の歴史的考察

まず, (4) の各名詞の出自, すなわち「語源」を探る (角括弧内には, *The Oxford English Dictionary*, 2nd edition [= *OED*<sup>2</sup>] に記載されているその名詞の第一義での初出年等を示している)。

(6) a. Anglo-Saxon: *harm* [Old English: OE], *homework* [a1683], *news* [1382], *weather* [OE], *work* [OE]

b. French/Latin: *advice* [1297], *applause* [1596], *conduct* [c1534], *damage* [1300],  
*equipment* [1748], *fun* [a1700], *information* [1387], *progress* [c1475]

c. Middle Dutch: *luck* [1530]

(6a) が古英語 (OE) 期からの英語本来語, (6b, c) が借入語で, その内 (6b) がラテン語・フランス語から, (6c) が英語と同じ西ゲルマン語の低地ドイツ語系統であるオランダ語からのものになる. 借入語はすべて中英語 (Middle English: ME) 期および近代英語 (Modern English: ModE) 期に取り入れられている.

OE には, 所謂不定冠詞は存在しなかったので, (6a) の内 OE 期から使われている三単語について, 複数形を以下に示してみる (丸括弧内は, 各名詞の文法的性 [masc[uline]: 男性, neut[er]: 中性]).

- (7) a. harm < hearm (masc.): hearmas  
 b. weather < weder (neut.): wedru  
 c. work < weorc (neut.): weorc

(7) より, 明らかに単数形と形態的に違う複数 (主・対格) 形を持っていたのは, harm と weather で, work は単複同形だったことが分かる (work は確かに主・対格は単複同形だが, 属・与格には独自の複数形態がある). そもそも, このように複数形が想定されているということは, これは何らかの加算用法が存在した証であろう. しかしこれに対して PSE では, その複数形を継承しているものは, 化石化した定型句のみにそれを持つ weather を除けば, works [作品] だけであり, しかもそれは意味的に異なっていて, 不可算名詞である [仕事・労働] の加算用法ではない (\*hard works は不可). そして, その weather の複数形を含む定型句は, (8a) の用例の in all weathers であり (下線は筆者の強調), 辞書には (8b) の定義が示されている (in all weathers = in all types of weather という解釈に注目).

- (8) a. There are homeless people sleeping on the streets in all weathers.  
 b. in all types of weather, even when it is very hot or cold

—Longman Dictionary of Contemporary English, 5th edition [= LDCE<sup>5</sup>] (s.v. weather)

「全ての天気・天候で」ということは, 「どんな時でも」ということを表し得るため, 成句的な定型表現として, かつて加算名詞として捉えられていた weather の複数形が化石化して PSE に残存しているのであろう (以下の (10a) も参照).

念のために OED<sup>2</sup> で (7) の OE 複数形を確認すると, いずれも当該不可算名詞の加算用法のようである (以下, 用例の角括弧内には, 現存する最古の写本の年代や成立年を示す).

- (9) a. **1. b.** With *a* and *pl[ural]*. An evil done or sustained; an injury, a loss.  
 b. Ealle synt uncre *hearmas* gewrecene.

[= All are our *harms* done.]

—Caedmon's Genesis, 756 [a1000]

- (10) a. **1. e.** *pl[ural]*. Kinds of weather: sometimes equivalent to *sing[ular]*. Now rare exc[ept] in *ph[rased]* (*in*) *all weathers*

- b. *Wedera* cealdost, nipende niht ond norþan wind, heaðogrim ondhwearf.

[= of-*weathers* coldest, darkening night and north wind, battle-grimly turned-against.]

—Beowulf, 546 [c1000 (8-9c.)]

- (11) a. **I. 1.** Something that is or was done; what a person does or did; an act, deed, proceeding, business; in *pl[ural]* actions, doings (often collectively = **3**). *arch[aic]* or *literary* in *gen[eral]* sense.<sup>7)</sup>

- b. **3. a.** Action (of a person) in general; doings, deeds; conduct. (Often conjoined with *word*.) *Obs[olete]*.

- c. *gescad witan, worda and worca*

[= distinction to-know, of-words and *works*]

—Beowulf, 289 [c1000 (8-9c.)]

(10b)・(11c) では, *weder* と *w(e)orc* の複数属格形が使われている. 上記 (9a-11a) の定義から分かることは, ①そこには「Obsolete (廃語)」という表記が見当たらない, ②現在不可算の *work* の加算用法は, そのより一般的な意味として一部レジスターに今でも残存している, ③ *weather* では, それを定型句のみに見ることができる, そして④ *harm* のそれは, 特に消滅してはいない (ただ, 用例は 19 世紀までしか記載されていない), ということである. つまりこれは, 現在「純粋」の不可算名詞と捉えられている上記本来語も実は, 確かにごく限定的ではあるが, その意味での加算用法が残存していることを我々に教えてくれている. だから, より正確な言い方をするならば, これらは PSE では, その加算用法が極端に限定的な形で存在する不可算名詞ということになる.

だが, 以上の議論はあくまでも不可算名詞の「複数形」加算用法に関することなので, (9a) に言及されている不定冠詞と (形容詞と) の共起を検証するには, どうしても不定冠詞が出現した ME 以降の状況を確認

認しなくてはならない。なお *OED*<sup>2</sup> (s.v. *weather*) には、不定冠詞を伴う単数加算用法の言及も見られる ((12))。そしてそこに我々は、13 世紀の *a ladlich weder* [= a loathesome weather] という初出例を確認することができる。

(12) **1. d.** With indef[inite] article: A kind of weather; a spell of a particular kind of weather. *Obs[olete]*.

(12) より、確かにかつて *weather* を個別化する捉え方はあったようだが、用例も 17 世紀までしか記載されておらず、現在では廃用になっていることが分かる。そこで次に、*The Middle English Dictionary* [= *MED*] (s.v. *harm, weder, werk*) を参照してみる ((13a)・(14a, b)・(15a, b) にそれぞれの定義およびそれに関連する定義を挙げる)。

(13) a. **1. (a)** Loss, ruin, harm, injury, wrong, damage, bad fortune; also an injury, a wrong, misfortune, nuisance

b. *Jelousie ... Maketh that full many a harm aris.*

[= Jealousy makes that very many a *harm* arises.]

—*Confessio Amantis*, 5.718 [a1393]

(14) a. **1. (c)** a particular kind of weather, a weather system, spell of weather [some quot[ation]s difficult to distinguish from sense **2. (b)**];—freq[uently] pl[ural]; (*sic*: no italics for 'pl.')

b. **2. (b)** adverse, unfavorable, or disagreeable weather; violent, stormy weather; also, a rain shower, storm, tempest

c. *Ʒeo com heom a wedere wunderliche feire.*

[= Then came to-them a *weather* wonderfully fair.]

—*Lazamon's Brut*, 3688 [c1275]

(15) a. **1 a (a)** A discrete act performed or undertaken by someone, (someone's) deed; also *coll[ective]* and *pl[ural]* (one's) individual acts, deeds, or actions, the things one does or has done in one's life, (one's) doings

b. **2. (a)** The role that someone or something properly fulfills, (someone's or something's) function; also *coll[ective]* and *pl[ural]* the operations, actions, or functions properly ascribed to someone or something, workings, functionings

c. *Ʒone leofæ Drihten & .. ðone Halize Gast .. alle wurcð an weorc.*

[= The dear Lord and .. the Holy Ghost .. all work a *work*.]

—*Bodley Homilies*, 3, 138/26 [c1175]

(13b) には、確かに不定冠詞 *a* が見られるが、これは複数を表す 'many a' という形式の一部なので、むしろ複数形の例と言うべきか。(14c) は明らかに「不定冠詞 + (副詞 +) 形容詞」となっているので、単数でも個別化を行っていたことの十分な証となる。(15c) は (15b) の定義の例である。これも不定冠詞の例と言うよりはむしろ、数詞 an 'one' の例と考えてもいいかもしれないが、単数として捉えていることに違いはない。このように、*MED* においても不定冠詞そのものを伴う上記三不可算名詞の加算用法の例はなかなか見つけ難く、複数として捉えられている例の方が目についたことは確かだ。しかしいずれにせよ、OE・ME 期には、現在は不可算のみでしか使われない *harm, weather, work* の加算用法が存在していたことが事実であることは確かめられた。と言うことは、この後、すなわち ModE 期以降、これらの名詞は不加算用法を強化していったことになろう。なお、複合語である *homework* に関しては、*work done at home* という意味での初出例は確かに 17 世紀だが、所謂 *lessons and exercises to be done by a school-child at home* という意味では、1889 年である。この頃には、*work* そのものが既に不可算用法のみとなっていたようで、*OED*<sup>2</sup> でも加算用法は認められなかった。

では、ModE 期以降、なぜ上記 (4) の名詞はかくも不可算性を強めたのか。ここではまず、所謂「複数形」を呈している *news* の語源を手がかりに考えたい。*OED*<sup>2</sup> (s.v. *news*) によれば、その初出は 1382 年と ME も既に末期である。これはどう見ても、明らかに「形容詞」*new* に名詞複数形語尾 *-s* を付加したものだ。<sup>8)</sup> どうやらこれは古フランス語の形容詞 *novele* (現代フランス語 *nouvelle* 'new') の複数形 *noveles* の「なぞり (calque)」であるらしく、またもっと言えば、中世ラテン語の中性形容詞の名詞用法 *novum* 'a new thing' の複数形 *nova* も関係するらしい。形容詞が名詞に転換された「新しき (こと) ども」ほどの意味であろう。そして、そもそも複数形にするということは、それは「なぞり」であったからこそだが、個別の存在を十分に意識していたことになり、加算的な見方が根底にあったということを表す。その証拠にかつては実際に複数形で使われていたのである。*OED*<sup>2</sup> には、15 世紀から 19 世紀の用例が挙げられている。

(16) a. **2. a.** Tidings; the report or account of recent events or occurrences, brought or coming to one as new information; new occurrences as a subject of report or talk

b. **These news were** sodainly spred throughout the cite of Cherona.

—Barnaby Rich, *His Farewell to Militarie Profession*, 58 [1581]

ところが、これと平行するように単数扱いが生じ、その初出は、(17) のように 16 世紀であったようだ (上記 (16b) と比較せよ)。

(17) I hearde speak of it, when the *news* therof **was** brought to Pope Iulie the seconde.

—*Curio's Pasquine in Traunce*, 36 [1566]

このように *news* は、形態上は明らかに複数であるにもかかわらず、結局単数扱いが定着し、しかも個別化も許さない特異な性質を帯びて行くのである。この道筋には、以下の二点が考えられるだろう。

(18) a. それまで本来語の不可算名詞を可算名詞として用いることは普通になされており、特にそのことは不定冠詞を帯びる単数形ではなく、「複数形」で実現することが多かった。

b. \*a (good) news のような「不定冠詞 + (形容詞 +) 複数形」という連鎖は、形式上明らかに矛盾なので、文法体系上ごちなく (awkward)、回避され易い環境であった可能性。<sup>9)</sup>

最後に、ME 期以降英語に取り入れられた (6b, c) の借入語の加算・不可算状況を検証する。それらを *OED*<sup>2</sup> で確認すると、その中心的な不可算の意味について、明確な可算用法が幾つか認められた (もちろんそれらは現在ではほとんどが廃用になってしまっているが)。つまり、これらの名詞も英語史の一時期までは「純粹」の不可算名詞ではなかったということである。以下の (19) に、それぞれの名詞の加算用法として、不定冠詞と共に、または複数形で使用されている例とその年代を提示する (丸括弧内には、不可算用法での初出年を斜線の左側に、その加算用法での初出年を右側に示す)。

(19) a. advice (1393/1490): ... several *advices* [1710], ... the farthest *advices* [1737],

*Advices* came down ... [1849]<sup>10)</sup>

b. applause (1596/1596): ... gaue **an** *applause*. [1623], Loud *applauses* rend ... [1725]

c. conduct (1673/1706): ... **a** *conduct* he saw [1706], **A** *conduct* which is not ... [1774],

**A** *conduct* which demanded ... [1818], **An** *improved conduct* ... [1859]

d. damage (1300/1470-85): ... for his *dommagis* & his felawes. [1470-85],

The *damages* & skathes ... [1577-87], ... so fowle **a** *damage*. [1593],

... for all *dammages* committed. [1600], Repairing the *damages* which ... [1771]

e. equipment (1748/1717): To forward our *equipments* ... [1793], The hunting *equipments* ... [1801],

*Equipments* which **are** ... [1873]

f. fun (1727/1719): And was not this **a** very good *Fun*? [1719]

g. information (1390/1527): **An** *information* of the parts of the world ... [1527],

... **a** longe *informacion*. [a1533], **A** *briefe information* of the Affaires ... [1624],

Many *informations* are ... [1666], ... some *informations* from ... [1724],

... in our notions, *informations*, ... [1845]

h. luck (1530/1530): ..., or I have **an** yvell *lucke*, ... [1530], Those evill *Lucks*, ... [1603]

i. progress (1500-20/1603): I am ashamed that I am not able to make **a** quicker *progress* through the French tongue. [1713]

上記の中で、(19b) と (19h) で不可算用法と加算用法の初出年が同じになっている点は些か説明が必要であろう。実は、(19b) の *applause* は、*OED*<sup>2</sup> ではそもそも不可算と捉えられていないのである。しかし、現在歴然と不可算用法があり、しかもそれしか認められていないという現実がある以上、とりあえず出発点は同じだったと考えざるを得ない。この名詞はなぜか途中で不可算のみに舵を切ったことになる。(19h) の *luck* は両方の例が同じ出典から取られている。つまり、元々両方の捉え方があったということであろう。さらには、(19e, f) に至っては、むしろ不可算用法の方が遅れて発達し、加算用法を凌駕したことが分かる ((19b) も究極このパターンと見ることが出来る)。その他のものは全て、まず不可算で出発し、途中加算用法も生み出したが、最終的には不可算のみに落ち着いたことになる。

こうして見てくると、これらの名詞に関しては、次のように考えられないだろうか。まず、いくら個別化した捉え方があるとしても、それが特に複数形で使われたならば、ある種「集合的に」捉えられ、不可算の読みが出やすくなり、さらには、不可算複数形もあり得る状況の中では、実質その不加算性が薄められない。その点、ME から発展した不定冠詞はその個別性をより強く表すことができるために、これら不可算名詞もこれを利用して一旦はその加算性を明示する流れに乗ったが、最終的にこれらが持つ本来の凝集性の方がそ

れを上回り、一種の反動として、今度はその不可算性をより高めることに繋がっていったのではないか。確かに、加算用法を十分に許す不可算名詞とそれを拒否するものとの根本的違いが一体何であるのか、後者の特異な凝集性は何によって生じるのかは依然として詳らかでないが、少なくとも過去には、後者にも何らかの加算用法があったこともまた事実である。だから我々英語学習者は、これらはただ「例外」であると決めつけてそこで思考停止するのではなく、1500年に及ぶ英文法の有り様の変遷の中でたまたま現在、不可算のみで捉えられていることを理解することで、無機質な暗記学習に陥らずに済むのではなかろうか。

#### 4 まとめ

究極のところ、言語には「メタファー (metaphor)」があるので、如何に不定形な捉えどころのないものであろうと仮想的にそれを文法上に個別実体化させることは可能なのである。Have a good time!に見られるように「時間」はその最たるものであろう。だから、数えられないとされる不可算名詞を実際に数えるということは、無規定な実体に想像上の線を引くことに他ならず、理論的には、基本全ての不可算名詞に起こりうると考えられる。しかし、現代標準英語では、それらの一部にそういったヴァーチャルな個別実体化をどうしても拒むものが「何らかの理由で」生じてしまっているという現実到我々は直面しているに過ぎないだけなのだ。<sup>11)</sup> その事実は確かに、ただでさえ特異性が際立つ英語の加算性の中でも、全く特異中の特異と呼んで差し支えないほどの現象であると言わざるを得ないが。

登田 (2021: 10) は、中学高校での英文法指導は「生徒が (暗記から脱却して、) ことば/言語表現がどのような (現実) 世界・状況を伝えようとしているのかを理解できる」ように行うべきであると主張しているが、筆者も全くこれに同感である。そして、この特異な不可算名詞群については、最終的に、児馬 (2018<sup>2</sup>: 118) が言うところの「小規則 (minor rule)」の一つとして、生徒たちがそれらをすべて暗記することはどうしても避けて通れないが、現代標準英語の時間軸だけでなく、彼らが英語をより立体的に見る機会を何らかの形で得ることを通じて、文法における名詞の柔軟性と硬直性の両方を日英語において少しでも考えることができれば、彼らの言語に対する感覚の涵養に十分繋がると筆者は考えている。

#### 註

- 1) Quirk et al. (1985: §5.4, n.) では、次のように英文法の特異性が述べられている (下線は筆者の強調)。
  - (i) The distinction between count [= countable] nouns and noncount [= uncountable] nouns is not fully explainable as necessarily inherent in 'real world' denotata. ... Rather, the justification for the count/noncount distinction is based on the grammatical characteristics of the English noun.
 また、池上 (1996: 43) でも「情報」は、英語では不可算名詞 information だが、フランス語では informations, ドイツ語では informationen, スペイン語では informaciones という複数形が各言語に歴然とあり、可算名詞として扱われる点が指摘されている。英語での特異性が際立っていると見えよう (Quirk et al. (1985: §5.9), Huddleston and Pullum (2002: 338) も参照)。ただし、「案内所」や法律用語の「略式起訴」という意味では、英語でも可算名詞扱いである。
- 2) 複数形態を持つ不可算名詞 thanks には、不可算名詞にも拘わらず、much ではなく、many が使われる many thanks という表現がある。LDCE<sup>5</sup> (s.v. many) の説明は以下の通り。
  - (ii) written used especially in formal letters to thank someone for something
- 3) しかし、複数形 waters になると、我々はイメージし難い。LDCE<sup>5</sup> (s.v. waters) では、a large area of water, especially an ocean that is near or belongs to a particular country とあり、the coastal waters of Alaska や Pacific waters という例が挙げられている。「海城」ほどの意味であろうが、なぜ複数形になるのか納得がいかない。
- 4) 単複同形可算名詞 fish の複数形が、この fruit の場合と同じく種類を表す場合に、fishes になることがあるが、綿貫・ピーターセン (2006: 336) は、これを「文学的表現」としており、江川 (1991<sup>2</sup>: 14) は、BrE では使われるが「普通ではない」としている。これに対して、松瀬 (2010: 182) では、OE fisc 'fish' には、fiscas という正統な複数形が存在したことを指摘した。つまり、これは元々単複同形ではなく、英語史の過程の中で通常の複数形が捨てられ、その後単複同形として捉えられるようになって行っただけなのだ。そして、非常に興味深いことに、この fish のその後の展開には、不可算名詞を個別化するプロセスと全くパラレルな扱いが見て取れるのである。
- 5) 逆に、LDCE<sup>5</sup> の Grammar Notes では、むしろ多くの場合 “has no plural form” とだけあり、不定冠詞に言及しているのは、advice, progress, weather, work のみだった。ちなみに、LDCE<sup>5</sup> での uncountable の定義は、“a noun that has no plural form and refers to something that cannot be counted” とされている。
- 6) ただ、不思議なことに、この部類に入ると思われる典型的な furniture については、(4) に示されてないし (不可算名詞であ

る集合名詞として掲載されている), *GEJD*<sup>5</sup>でも(5)の注意喚起がなされていない。意味的に見て, *equipment* とパラレルなので, 指摘されてもよさそうなものだが。

- 7) *OED*<sup>2</sup> (s.v. *work*) の **I. 2.** の定義では, 以下のようにになっている (下線は筆者の強調)。  
 (iii) Something to be done, or something to do; what a person (or thing) has or had to do;  
 occupation, employment, business, task, function. Often only contextually distinguishable from **1.** (= (11a))  
 どうやら, 人が「する事」と「すべき事 (特に仕事)」との区別は判然としないようである。
- 8) フランス語文法では, 形容詞は修飾する名詞の性・数に応じて形態を変えなくてはならないという規則がある。これがME期に一部英語にも持ち込まれていたことを Horobin (2010: 115) が指摘している。news 導入にもこのような下地が影響していたと思われる (下線は筆者の強調)。  
 (iv) A further development is the L[ate]ME period was the appearance of an -s plural adjective ending, whose appearance can be linked to the similar French practice. ... as in Chaucer's *weyes esprituels* [= spritual ways].
- 9) 類似の例に *means* がある。ただ, *means* は単数・複数扱いがなされ, *LDCE*<sup>5</sup> (s.v. *means*) によれば, a way of doing or achieving something (下線は筆者の強調) という単数用法において, 不定冠詞と共起する **a means to an end** などの表現が可能である。おそらく, この *means* と *news* との大きな違いは, *news* には機能上複数用法が現在認められていないという点であろう。
- 10) 正確には, この複数形 *advices* は, 商取引で使う「(遠隔地などからもたらされる) 情報」という意味だが, 助言・意見のより具体化したものとして取り扱うことが可能で, 実は, *weathers* と並び現在まで残り続けている数少ない加算化の例と言っていだろう。
- 11) 松瀬 (2017) で論じたように, なぜ *I hope not.* は *I don't hope so.* にならないのか, なぜ *hope* は「do 否定」を頑なに拒否するのか, この一際特異な不可算名詞群と同じく, その正確な理由は明らかになっていない。

#### 参考文献

- Biber, D. et al. 1999. *Longman Grammar of Spoken and Written English*. Harlow: Pearson.
- Depraetere, I. and Langford, C. 2020. *Advanced English Grammar: A Linguistic Approach*. 2nd edition. London: Bloomsbury.
- 江川泰一郎. 1991. 『英文法解説』改訂三版. 東京: 金子書房.
- Horobin, S. 2010. *Studying the History of Early English*. Basingstoke: Palgrave Macmillan.
- Huddleston, R. and Pullum, G. K. 2002. *The Cambridge Grammar of the English Language*. Cambridge: Cambridge Univ. Press.
- 池上嘉彦 (ed.) 1996. 『英語の意味』 東京: 大修館.
- 児馬修. 2018. 『ファンダメンタル英語史』改訂版. 東京: ひつじ書房.
- Kurath, H. et al. (eds.) 1956-2001. *The Middle English Dictionary*. Ann Arbor: The Univ. of Michigan Press.
- 松瀬憲司. 2010. 英語の単複同形について. 『熊本大学教育学部紀要人文科学編』, 59, 177-188.
- 松瀬憲司. 2017. "Not or don't, that is the question.": *I hope not* vs. *\*I don't hope so*. 『熊本大学教育学部紀要』, 66, 83-90.
- 南出康生 (ed.) 2014. 『ジーニアス英和辞典』第5版. 東京: 大修館.
- Murray, J. A. H. et al. (eds.) Prepared by J. A. Simpson and E. S. C. Weiner. 1989. *The Oxford English Dictionary*. 2nd edition. Oxford: Clarendon Press.
- Quirk, R. et al. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.
- Sharifian, F. 2015. Cultural Linguistics. In F. Sharifian (ed.), *The Routledge Handbook of Language and Culture*, 473-492. Abington: Routledge.
- Summers, D. (dir.) 2009. *Longman Dictionary of Contemporary English*. 5th edition. Harlow: Pearson.
- Swan, M. 2016. *Practical English Usage*. 4th edition. Oxford: Oxford Univ. Press.
- 登田龍彦. 2021. 『英語教師を変える楽しい学び直し—自律的学習を導く語彙・文法指導の原点—』 東京: 開拓社.
- 綿貫陽・ピーターセン, M. 2006. 『表現のための実践ロイヤル英文法』 東京: 旺文社.